

ローラ・ケテリング
ハナ・リトル

日米における障害がある人に対する認識の研究

1. こんにちは、私たちはローラ・ケテリングとハナ・リトルと申します。今日は、私達のキャプションのタイトルは「日米における障害がある人に対する認識」の研究です。
2. これが研究発表の概要です。
3. 私達がこの研究課題に興味をもった理由は日本に留学した時、留学生の為のカウンセリングがほとんど提供されていなかった事に驚いたからです。障害について自由に話すことができるセーフスペースが必要だと思いました。また、障害に対する日米の大学生の認識がどのように違うのかをもっと知りたいと思ったからです。
私には障害があり、障害がある家族も多いです。CSUMBでは、障害があるアメリカ人の学生に対する支援が少ないです。私が日本に留学した時、大学には障害者サポートセンターがありませんでした。また、この研究を通して、日米の大学にどのようなサポートがあるか調査してみたいからです。
4. 私達の研究質問は、一：日米の大学生の障害がある人に対する見解はどのようなものか、二：日米の大学生は障害がある人が利用可能な設備や施設についてどの程度理解しているか。
5. この研究の背景としてこれらの点について話します。
6. まず最初に障害とは何かですが、ADAによると「個人の多数の生活活動を相当に制限する身体的または精神的障害」となっていて、障害は三つの方法で定義されます。一つ目は、身体障害で、二つ目は知的障害、三つ目は精神障害です。
7. 障害には見える障害と見えない障害があります。見える障害は「肉眼で見えるだけで障害に気づかれる」障害で、見えない障害は「外からは見えないが、人の動き、感覚、または活動を制限する障害で、身体的、精神的または神経学的な障害」のことをいいます
8. 調査で述べられた障害の定義は四つあります。
失読症とは、「学習障害の一種で、知的能力に特に異常がないにもかかわらず、文字の読み書きに著しい困難を抱える障害」です。そして、糖尿病とは「インスリンが十分に働かないために、血液中を流れるブドウ糖が増えてしまう病気」で、脳性麻痺とは「運動や姿勢に影響を与える運動を司る脳の一部分が損傷して筋肉を正常に動かすことができなくなる」と言う障害で、さらに、ダウン症とは「染色体異常により、身体的発達の遅延、特徴的な顔つき、軽度の知的障害が特徴」です。

9. 統計によると、アメリカ人は日本人よりも障害に関する診断が多いです。
10. カリフォルニア州立大学モンレーベイで障害がある人は様々な種類の支援を受けられます。CSUMBでは、障害の管理アドバイス、支援技術、教室用家具の代替、障害がある生徒のためにキャンパスについてのオリエンテーション、別の人がノートを取り、代替フォーマット、代替の試験があります。
11. 筑波大学の支援は、ピア・チューター、定期試験における配慮の依頼、視覚障害がある人向けの点字オプションなどを大学が提供しています。同志社大学の支援は、大学生が精神科医と精神保健相談ができる機会も提供されています。
12. それではここで私達がした研究についてお話しします。参加者は日本とアメリカの大学生63人でオンラインによるアンケート調査を行いました。
13. 回答者は両国とも男性より女性が多かったです。
14. アメリカ人の大半は大学3年生から5年生で、日本人の大半は1年生・2年生でした。
15. 回答者のほとんどの大学生は地方都市に住んでいますが、都市に住んでいる日本人の方がアメリカ人より多いです。
16. それではここで研究質問1の結果について話します。
17. 「下記の中で障害を持っている人を知っていますか」という質問に対してアメリカ人は障害がある家族・友達・同級生を知っていると答えました。日本人はほぼ50%の人が障害がある友達を知っていますが、30%は誰も知らないと答えました。
18. 「あなたの周りで障害を持っている人はいますか」という質問には、日本人は「0人から3人知っている」、アメリカ人は「1人から9人知っている」と答えました。
19. 回答者の日本人は糖尿病を一番よく知っていましたが、失読症については全く知られていないようです。ほぼ10%の人が糖尿病は障害ではないと思っていました。
20. アメリカ人の回答者は糖尿病・失読症をよく知っていますが、脳性麻痺は全く知られていないようです。アメリカ人は日本人よりここにあげられている障害について知っていました。
21. 「障害がある人は、必要がない限り自分の障害について話すべきではないと思いますか。」という質問にはアメリカ人の答えと日本人の答えは異なり、日本人は障害について話してはいけないと思っていることがわかります。

22. 「うつ病や不安障害や躁うつ病などの精神病は障害だと思いますか。」にはアメリカ人は精神病は障害だと思っていると答えましたが、日本人の半分が「そう思わない」と答えました。
23. 「軽度から中度の障害がある人は充実した生活ができると思いますか。」という質問には両国のほとんどの人がそう思っていますが、**日本人の中には否定的な答えもありました。**
24. 「もしあなたに障害があったら、他の人に伝えますか。理由は何ですか。」に関してはアメリカ人は「オープンなコミュニケーション」や「誠実」さは大事だと思うと答えた人が多かったですが、日本人は「緊急時の為」や「便宜を図って」は大事だと答えた人が多かったです。
25. ここで研究質問1の結果をまとめます。
アメリカ人は障害がある人の能力とない人の能力が同じだと思っていて、アメリカ人は日本人よりも障害がある人との経験や病気についての知識があります。アメリカ人は精神疾患を障害だとみなしていますが、日本人はそうではありません。日本人は必要がない限り、他人の障害について、話題にしない方がいい、と考えています。また安全上の理由を除いて自分自身の障害についても話さない方がいいと思っています。日本人は、障害についての経験や知識が少ないために、障害がある人は自分自身の障害について話すべきではないと考えていたり、精神疾患や糖尿病は障害とは思っていないのかもしれないかもしれません。
26. 次に研究質問2の結果を発表します。
27. 「あなたが学校で障害について、最初に学んだのはいつですか。」という質問に対して日本人の68%が小学校で学んでいるが、アメリカの場合は幼稚園から大学までとすべての学年にわかれしました。
28. 「あなたのクラスに障害のある同級生がいることに初めて気付いたのはいつですか。」という質問に対して、日本人の52%が小学校に於いて学んでいましたがアメリカの場合は幼稚園から大学までとすべての学年にわかれしました。
29. 「あなたは、「障害者基本法」に関して十分な情報を知っていますか」、という質問に対して、両国の大学生は障害がある人の為のこの法律を十分に知らないと答えました。
30. 「あなたは障害がある人を支援する制度を知っていますか」という質問に対して両国の回答者は知っている人と知らない人と半分に分かれしました。
31. 「現在の教育の場の障害に関する学習は十分だと思いますか」という質問に対して、両国の回答は似ていますが、より多くのアメリカ人は障害に関する学習が不十分であると答えました。
32. 「あなたの大学は障害がある人に十分な対応をしていると思いますか」という質

問に対して両国とも大学での障害がある人に対する対応は十分としているとしていないとする見解に分かれました。

33. 「あなたの大学は障害のある人に対する対応に関して、誰・どこに連絡をすればよいかについて分かりやすく情報を提供していると思いますか」という質問に対してアメリカの大学生は誰に連絡をすれば良いか知っていましたが、日本人の大学生は知らないと回答しました。
34. 「障害がある生徒がより良いサポートを受けるためには、障害のない生徒とクラスを分ける必要があると思いますか」という質問に対して日本人の大学生は分ける必要がないと答えました。
35. アメリカの学生はその反対でアメリカ人の大学生は障害がある生徒とない生徒がクラスを分ける必要があると答え、日本はアメリカと意見が異なりました。
36. それではここで研究2の結果のまとめを話します。アメリカ人は日本人よりも障害について意識が高いことがわかりました。また、アメリカ人は学校で、継続的に障害に関する教育を受けていますが、日本の場合は小学校で教育を受けるだけです。しかし、どちらの国の学生も障害に関する教育は不十分で、また、アメリカ人は障害がある生徒を分けるべきだと答えましたが日本人は分けない方がいいと答えました。さらに、アメリカ人も日本人も、障害がある人の為の法律についてはあまりよくしらず、アメリカ人ははっきりと誰に連絡をすれば良いか知っている一方、日本人はよくわかっていません。両国とも大学での障害がある人に対する対応は十分としているとしていないとする見解が分かれました。
37. それではここで結論をまとめます。
日本人は精神疾患を障害とは考えていないので、この事が障害を論じるべきではないという考え方と、関連しているのではないかと、思います。精神疾患を恥とみなす社会通念かもしれません。日本人は小学生の時に障害について正式な教育を受けますが、その後は障害に対する教育は行われません。このため障害に対する意識は次第に衰えます。アメリカ人は、特殊教育の徹底により、障害がある生徒を障害がない生徒からわけても問題ないと考えています。アメリカ人は日常的に障害がある人と接する経験があり、特定の障害についてもより多くの知識をもっています。
38. この研究の限界点として、参加者が少なく、この結果は一般化することはできません。将来の課題としては他の障害に関してもっとしらべたいと思います。さらにアメリカでは障害がある生徒とない生徒とクラスを分けるか必要があるという認識が強いですがその理由をさらに追求したいと思います。
39. これが参考文献です。
40. ""
41. ""
42. 先生方を始め、みなさまに感謝いたします。ありがとうございました。